

□ 各地の音楽活動 ● 北海道

八木幸三

札幌交響楽団は6月に600回目の定期演奏会をおこない、首席指揮者マックス・ボンマーがモーツァルトの三大交響曲を佳演。王道の古典派音楽により札幌の原点回帰を暗示するものとなった。パッサラの管弦楽組曲（1月定期）や「クリスマス・オラトリオ」（12月定期）など、札幌創設時の礎となったドイツ系音楽を自らのDNAで再注入したボンマーに代わり、来春から国際派で多彩なレパートリーを持つ、マティアス・パーメルトが首席指揮者に就任することが決定。彼の豊富な音楽経験が、札幌サウンドにどう膨らみを持たせるのか大きな期待が寄せられる。そして、今年最大の話題は、11年間にわたり首席客演指揮者、名誉指揮者を務めたラドミル・エリシュカが10月定期を最後に札幌との特別な関係に終止符を打ったこと。3月定期では、ブラームス交響曲シリーズの最終回として第1番を覇気のある堂々とした楽想で仕上げ、10月定期では初共演時に演奏したリムスキー＝コルサコフの交響組曲「シェエラザード」を鋭さと高揚感のあるドラマで展開させた。しかし、86歳を迎えた彼にとって欧州との往復は、大きな負担であったことも事実。母国チェコ作品をはじめドイツ、ロシア作品の伝統を伝えながら団員と厚い信頼関係を作り上げた成果は大きい。この奇跡の出会いにあらためて感謝したい。さらに、ハインツ・ホリガーがラトヴィア放送合唱団を伴った5月定期が印象的。彼が指揮するマラーの「アダージェット」に続き、この曲をア・カペラ合唱にした「夕映えのなかで」（ゴットヴァルト編）が、至高のハーモニーで放たれ、弦楽合奏と合唱の鮮烈な対比を体感できた。8月定期では、ユベール・スダゲンが札幌首席管楽器奏者たちを独奏に据えたモーツァルトの「協奏交響曲」を極上のアンサンブルで聴かせた。札幌と六花亭ふきのとうホールが、管楽合奏によるシリーズを開始。第1回目はモーツァルトの「グラン・パルティータ」などで、札幌のひとつの方向性を示した。今年から友情客演指揮者となった広上淳一は、4月定期でホルストの組曲「惑星」全曲と年末の第9を札幌合唱団を伴い豪快なタクトで聴かせた。

28回目となったパシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）は、ワレリー・ゲルギエフが、第6代芸術監督となって3年目に入り、PMFオーケストラ（PMFO）のCプロで采配を振るった。ゲルギエフは、すでに2020年まで芸術監督を継続することが決定しており、この巨匠が芸術監督に長期間就任することは、PMFが世界のクラシック音楽界において、益々重要な役割を果たしていることを物語る。今回は、前半が首席指揮者となった準・メルクルがA・Bプロで得意の現代作品など多彩な曲目を取り上げた。彼は、さらにコンダクティングアカデミーの指導にもあたり、3人のフレッシュな指揮者がPMFOをドライブ。柳澤謙は、交響詩「レ・プレリュード」を慎重な指揮で振り、台湾出身のスーハン・ヤンは、ドビュッシーの「イペリア」を明晰できめ細かに指示。作品を十分に咀嚼し、自分のイメージを明確に伝えていたという点で、交響詩「ドン・ファン」を指揮したポーランド出身のダヴィット・ルンツが、個性的な指揮で秀逸だった。教授陣は、会期前半にはウィーン・フィル、ベルリン・フィルのメンバーを中心とした「PMFヨーロッパ」が、後半にはメトロポリタン歌劇場管、シカゴ響など北米のメジャー・オーケストラのメンバーによる「PMFアメリカ」が招聘され、今年も充実した指導体制となった。特にウィーン・フィルのコンサートマスターだったライナー・キュヒルは全期間中指導にあたり、地元音楽大生への公開レッ

スンもおこなった。PMF創設者バーンスタインを讀えたレガシー・コンサートでは、米国を中心に活躍する大山平一郎の指揮で、田村響を迎えて、バーンスタインが何度も弾き振りしたベートーヴェン／ピアノ協奏曲第1番を演奏。PMFの成果が結集するGALAコンサートでは、往年の名ソプラノ歌手ガブリエラ・トゥッチが指導した4人のポータル・アカデミー生がオペラ・アリアを披露。PMFOのCプロでは、ゲルギエフが抜擢した16歳のヴァイオリニスト、D. ロザコヴィッチがブルッフのヴァイオリン協奏曲を清澄な美音で奏でた。

北海道二期会は、3月に「ヘンゼルとグレーテル」、11月に木下牧子作曲の「不思議の国のアリス」を公演。いずれも小ホールの公演で伴奏もピアノ版やピアノ八重奏版などコンパクト化されていたもののベテランキャストの洒落な歌唱と演技、工夫された演出で観客を楽しませた。両オペラを手堅くまとめ上げた若手指揮者、鎌倉亮太も健闘。さらに前者ではHBC少年少女合唱団、後者では札幌山の手高等学校合唱部の爽やかなハーモニーと闊達な演技が話題となった。北海道教育大学・実験劇場が二橋潤一作曲のマドリガーレ・オペラ「箱館戦争」を30席ほどの小スペースで複数回公演。45分ほどの上演時間ながら、榎本武揚と黒田清隆との緊張したやり取りが濃厚に描かれた。若手音楽家団体「musicAnello」が第1回公演として「愛の妙薬」を原語上演。経費を押さえた小ホールでのカジュアルなステージは、今後のオペラファン拡大にもつながるだろう。18年度に開館する本格的なオペラハウス札幌文化芸術劇場は、こけら落とし公演で「アイダ」を上演する。その指揮者アンドレア・パッティストーニと共演する札幌が、9月にプレイベントとしてイタリアオペラの神髄をたっぷりと聴かせ、本公演への期待を膨らませた。

ベテランピアニストのリサイタルでは黒山映が、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトのハ短調によるピアノソナタを並べ、ロマン派へ至る各曲の関連性を伶俐に伝え、ドイツで豊富な演奏経験を持つ大平由美子がシューベルトのソナタなどで人生の深遠さを感じさせるステージを展開。シューマンを得意とする影山裕子は、「幻想曲ハ長調」をロマン性を進らせながら抒情豊に聴かせた。若手ピアニストでは、室蘭を拠点に活動する黒田佳奈子がブラームスの変奏曲を多彩な表情で描き分け、渡部美露がスクリャービンの「幻想ソナタ」をダイナミックに表現し、今後の躍進を予感させた。

声楽では、駒ヶ嶺ゆかりが、シベリウス作品を核に、その作品と共鳴する作曲家の世界を繰り広げていく「魂心の人」シリーズ全5回を6月に完結。吉泉善太（ピアノ）、吉泉奈々子（ソプラノ）と共にメリカントなどの歌曲を熱演。駒ヶ嶺は12月に宮下祥子のギター伴奏で「冬の旅」全曲も演奏した。79歳のメゾ・ソプラノ田中則子は、病魔と闘いながら10月に1年半ぶりのリサイタルを開催。若見沢出身の作曲家猪木隆の歌曲「ゆうれい屋敷」などを迫真の歌唱でドラマチックに聴かせた。

開館20周年を迎えた札幌コンサートホールが毎年開催しているリスト音楽院セミナーでは、チェロの名匠ミクロン・シュ・ペレーニをはじめとする4人の音楽院教授による演奏会がおこなわれた。北海道打楽器協会が創立10周年を記念し、世界的マリナー奏者安倍圭子を迎え、邦人作品などでダイナミックなステージを展開。道内演奏家で構成された室内合奏団「レ・ポムボム」は、武満徹などの邦人作品を「地・風・火・水・天」の五大元素と関連つけたプログラムで聴き手を楽しませた。新進演奏家育成プロジェクト リサイタル・シリーズSAPPOROは、1月に川本映が清新なフルートの音色を聴かせ、12月には三上絵里香が多彩な曲目で伶俐なピアノズムを披露した。

創立10周年を迎えた北海道作曲家協会は9月にその記念演奏会として20人の会員作品を一挙に発表。約4時間にわたりピアノ、声楽、器楽など多彩な作品を披露し、記念企画として少年少女合唱による3作品も演奏された。また、青森県作曲家協会から2作品が招待演奏され華を添えた。